

羽田澄子演出作品

2008年第82回キネマ旬報文化映画ベストテン第1位
 2008年日本映画ペンクラブ賞文化映画部門ベスト1
 2008年東京国際女性映画祭オープニング作品
 2009年度文化庁映画賞（文化記録映画部門）受賞



今でも誰か官僚に聞きたい。
 何で私たちを満州へ送り出したのかって



開拓団の人たちがトラックの窓に手をかけて「乗せてってくれ」って。それを振り払っていっちゃうんだから。

主催

「嗚呼満蒙開拓団」上映実行委員会
 後援

茨城県、茨城県教育委員会
 土浦市、土浦市教育委員会
 牛久市、牛久市教育委員会
 石岡市、石岡市教育委員会
 阿見町、阿見町教育委員会
 つくば市、つくば市教育委員会
 取手市、取手市教育委員会
 水戸市、水戸市教育委員会

なぜこの悲劇は起きたのか

嗚呼満蒙開拓団

あ
 ー
 まん
 もう
 かい
 たく
 だん

県内初上映



妹は最後に「お芋食べたーい、お芋食べたーい」といっている間に連れて行かれた



満州に行くときは、皆「国のため」と行ったの。あんな遺骨を見ると残念で。

ご挨拶

池田澄江

(元中国残留孤児国家賠償
 訴訟原告団全国連絡会代表)

藤岡サエ子

(茨城中国残留邦人帰国者
 および支援する会会長)

と き 5月29日(土)

第1回上映 13:30

第2回上映 18:30

ところ 土浦市民会館
 小ホール

入場料 大人 1,000円

当日券 1,200円

高校生 800円

小・中学生無料

駐車場は無料です

「嗚呼満蒙開拓団」上映会実行委員会

発行：2010年4月30日

連絡先：長南029-887-8038
 横山029-857-6369

中国残留孤児 支援活動にご協力を

2008年1月1日「改正中国残留邦人支援法」が施行されました。この法律の一つの目的に中国残留邦人が地域社会の中で生き生きと暮らすことのできる社会を構築するために、身近な地域での日本語教室や地域との交流事業等も適宜実施されていることになっていきます。この事業は、厚生労働省管轄で補助金が支給され、自治体などが事業主体となって実施されるものですが、残念ながら茨城県では実現していません。

私たち「ぼたんの会」と日中友好協会茨城県南支部では、これらの趣旨に添って地域での交流事業を行っています。昨年は、中国大使館の後援を頂き、中国従軍写真家「沙飛」写真展を実施しました。短期間の取り組みでしたが、200名を超える参加者で成功しました。今年は、映画会を実施することになりました。この事業の趣旨をご理解の上、多くのみなさんに実行委員会参加とご協力を心から呼びかけます。

ぼたんの会会長 藤岡サエ子
日中友好協会茨城県南支部

支部長 横山和夫

映画紹介「嗚呼満蒙開拓団」

監督 演出 ナレーション 羽田澄子 08/日本/カラ - /120分

この映画は、2009年度文化庁文化記録映画大賞作品で、贈賞理由に『数十年も故郷に帰れなかった満蒙開拓団民の人々の思いをしっかりと受け止めていく構成、作者自身の目と耳と足を駆使して現地の風土を一步步ずつ確かめていく展開は、口当たりの良い歴史解釈が束になっても敵わない、百聞に勝る「発見」に満ちている。』とあります。監督が満蒙開拓団の歴史を平和への強い祈りをこめて作り上げた作品です。

映画は07年1月30日早朝、東京日比谷公園の露門へ続々と集まる中国「残留孤児」たちの場面から。国家賠償訴訟裁判の判決の日です。公園の一角が不思議な光景、北京の下町になったようでした。日本人なのにニコニコしながら大きな声で中国語が飛び交いました。土浦で知り合った帰国者の松枝さんの姿も。今日こそは今までの苦勞が報われるいい判決がでると確信にみちた明るい顔、顔。裁判支援者も帰国者も判決の結果を今か今かと待ったが結果は「敗訴」。悲鳴に近いどよめきがひろがり、怒りと悔しさで泣き崩れる女性達…

このことが解決しなければ戦後は終わらない…映画はこの場面を追うことから始まります。

満蒙開拓団とは1931年の満州事変後、日本政府の国策によって中国東北部に入植させられた日本移民です。開拓団はなぜ送られたか、どんな悲劇をたどったか。今まで知らされてこなかった、歴史の事実が次々とあきらかにされていきます。

私が衝撃を受けたのは、中国方正（ほうまさ）県にある日本人公墓が、どのような過程でつくられたかです。現地の人と引揚者の証言から、これらが明らかにされます。敗戦後、日本軍は開拓団を置き去りにしました。自力で逃げるしかない開拓団たちは飢えと疲労、寒さでつぎつぎ命を落としていきます。方正地区でも、満州の奥地から集まった多くの避難民のうち数千人がなくなりました。敵国人でもあった中国残留婦人（松浦範子さん）の手紙が周恩来首相の心に響き、現地の方々の協力で公墓が実現しました。文化大革命の混乱の時期にも必死にお墓を守ってくれた中国の皆さんの尽力を日本人は深く心に刻むことが大切ではないでしょうか。語りべの方が老いていくなかで、ぜひともこの映画を通して、東アジアの過去と現代を知り、考えて欲しいと思います。

シネ・フォーラムつちうら 代表 福田勝夫

実行委員会連絡先

：ぼたんの会（中国残留邦人帰国者及び支援者の会）

日本中国友好協会茨城県南支部

連絡先：横山029・857・6369、長南029・887・8038、
板垣090・4175・8427、利根川090・9348・2780
福田090・3537・2632

私たちも応援します
募集中です。

映画「嗚呼 満蒙開拓団」 県内で初上映



出演の元孤児来訪、体験語る

戦前に国策で中国・東北部（旧満州）

に渡った開拓団の悲劇を追った記録映画

「嗚呼 満蒙開拓団」（2008年、1

20分）が29日、県内で初めて土浦市民会

館で上映される。元残留孤児で、映画の冒

頭に登場する同市出身の池田澄江さん

（65）＝東京都足立区在住＝が当日、舞台

から自身の体験などを語る。（長田寿夫）

29日、土浦で

1931年の満州事変後に始まった満蒙開拓は、20万人以上が入植。旧ソ連軍の侵攻などで約8万人が死亡、多くの残留孤児を生み出した。

澄江さんもその1人。敗戦後、一家は収容所を転々とする中、1歳に満たない澄江さんを子どもに託す。

伝染病と栄養失調で死者が続出する中、母乳が出なくなった母の苦渋の決断だったという。

当時、小学1年生だった姉の長南美佐子さん（72）は別れ際、

澄江さんの柔らかい手足に触れ、「きっと迎えに来るからね」とささやいた。中国人に抱かれた妹の笑顔をはっきりと覚えてる。

澄江さんはその後、中国の師範学校を卒業。中学教師になったが、81年に自費で帰国。そうとは知らない長南さんら2人の

姉は、妹を捜しに何度も中国へ渡り、「すれ違い」が続いていた。

94年暮れ、再会は偶然だった。姉たちは手がかりを求めて、東京・代々木の残留孤児訪

日調査会場を訪れた。流暢な中国語を話す「日本人通訳」が目にとまった。

「きれいな中国語ですね」「私、残留孤児なんです」

50年前に別れた妹だった。

映画は、自身も旧満州生まれで引き揚げ者でもある羽田澄江さんが監督、演出、ナレーション

を務める。「若い人にこそ見てほしい。日本がなぜ戦争に突き進み、その結果、どんな目にあつたのか、学校で教わらない真実を知ってほしい」と長南さん。

上映は29日午後1時半と同6時半の2回。澄江さんは1回目、2回目にはやはり元残留孤児で取手市に住む藤岡サエ子さんが、それぞれ上映後に話をす。大人1200円（前売り千円）、高校生800円。問い合わせは長南さん（電話029・887・8038）へ。